

佐々木交賢先生の思い出

杉山 由紀男

佐々木交賢先生の本学での34年間にわたる教育と研究のご業績、そして創価大学社会学会会長としての活動をはじめとする本学発展への多大のご尽力に衷心より敬意と感謝の意を表し、「先生、本当にお疲れ様でした。ありがとうございます」と申し上げる。

佐々木先生を知ったのは学部1年生の一般教養の「社会学」の講義の時であった。教卓のマイクが扱いにくいのかいつもマイクから幾分離れて話され、独特の東北なまりのけして大きくない声で講義されたので、同級生たちは聞き取りにくいと言っていたが、前方の席で講義を受けていた同じ東北出身の私はよく聞き取れた。先生は秋田のお生まれであるが、東北大学に学ばれたことやその後宮城学院女子大学で教鞭を取られるなど宮城の地で多く過ごされている。同じ宮城県で生まれ育った私は大学入学の当初から佐々木先生に親しみを感じた。当時先生はデュルケム社会学の研究ですでに著名であられたので、高校まで理科系のクラスにいた私は、「社会的事実をモノのように見る」デュルケムの自然科学的な方法論が単純明快で分かりやすいと感じ、佐々木ゼミで勉強したいと思うようになった。

ゼミでの先生、研究室での先生は、講義のときの先生とは別の表情を見せてくれた。講義のときの厳格で、どちらかというところ“とっつきにくい”イメージとは違って、物腰低く丁寧に教えてくださり、ときには冗談やギャグも飛ばされ、ゼミコンパのときなどはよくお酒も飲まれ、しかも強かった。そしてなにより、先生は温かいやさしさに溢れていらっしゃった。だから女子学生にもとても人気があった。学部3年生のとき、私は学生自治会の学部執行部の責任者として学費問題などの課題と取り組み、寝不足の活動の日々を過ごしていた。ある日、20名のゼミ生の中でたまたま先生から最も遠い位置

に座っていた私は、不覚にもゼミ中に居眠りをしてしまった。「お前を起こそうとしたんだが、佐々木先生が“杉山君は毎日忙しくて疲れているから起こさなくていい”とおっしゃったんだ」と、隣に座っていた友人から後で聞かされたときは、恥ずかしさとともに、先生の大きさと温かさを感じ、反省と感謝の気持ちでいっぱいになった。しかし、学問についてはあくまで厳しく、私が学部の手助時代にデュルケムに関する発表を行ったときなどは、先生は他の参加者の発言を許さないほどの勢いで質問や過ちの指摘を息つく間もなく機関銃のように繰り出し、私は閉口したことがあった。このような学問に対する厳しさと人間的な温かさについては、「デュルケムがそのような人だった」と佐々木先生が呟くようにおっしゃっていたのを覚えている。デュルケムに倣っていたのだろう。

佐々木先生のご業績はその数多い論文や著書に結晶している研究面と教育の面だけでなく、日本の学术界の発展と、さらに海外との学術・文化の交流にも多大の貢献をされたことも特筆されるべき点である。とりわけ日仏社会学会の会長として成し遂げられたご業績は多岐に渡る。歴史は古くユニークな活動を展開してきた同学会ではあったが、独自の研究紀要がなく、1992年に佐々木会長が誕生するや、翌93年には『日仏社会学会年報』を創刊し、現在までに14号を刊行して、若手研究者をはじめ多くの研究者に成果発表と交流の場を提供している。また、同学会では、1953年に日仏両国政府間で結ばれた「文化協定」に基づいて、3年ごとに日本とフランスで交互にシンポジウムを行ってきたが、佐々木会長は様々な財団などからの応援を得るための精力的な活動を展開して、その第7回から第10回までを主催され、シンポジウムを大きな発展の軌道に乗せた。そして、その成果を『年報』特集号として3度編纂し、さらには『高齢社会と生活の質』（専修大学出版局）として出版、またそのフランス語版はQUND LA VIE S'ALLONGE France-Japonとしてフランスのl'Harmattan社から出版されている。また、先生が出版委員長となって、フランス人研究者も執筆陣に加え、本年春『日仏社会学叢書』全5巻（恒星社厚生閣）が同時刊行される予定である。

さらに、この間ピエール・アンサール氏をはじめとする多くのフランス人研究者と日本人研究者の交流と相互理解の輪を拡大し、多くのフランス人社

会学者を日本に招き、95年には本学にも5名のフランス人社会学者を招いて、講演会や学生との交流会を持たれた。フランス人研究者との交流をさらに推進しようとする佐々木先生は、日仏の共同研究を企画され、日仏会館と石橋財団の助成を受けて、「高齢社会」をテーマとした2年がかりの共同研究を実施し、その成果も研究報告書として刊行している。さらに文部科学省が助成して日仏会館が行っている日仏学者交換の事業にも積極的に取り組み、日本から社会学者を派遣するだけでなく、フランスからデュルケム研究でも著名なJ-C・フィュー氏を日本に招聘して講演会・研究会を持ち、本学にも招いて学生との交流の機会を作られたのである。これらは一端に過ぎないが、このような日本とフランスの学術・文化の交流と相互理解に寄与された先生の多大の功績はフランス政府が叙勲を持って顕彰するところとなり、2001年6月にフランス学術功労章オフィシエが先生に贈られている。日仏社会学会の事務局の担当者として、こうした佐々木先生のさまざまな活動を拝見するだけでなく、それに参加できたことを嬉しくありがたく思うかぎりである。

佐々木先生との思い出は尽きない。日仏社会学会の理事会にいつも車で一緒したが、きまって中央高速の石川パーキングで「多摩ラーメン」を食べたのも楽しいひと時だった。会長を後進に譲った今も先生は同学会の理事だから、この楽しみはこれからも続く。そして何より、学生時代から今日に至るまでの創価大学での先生との数々の思い出こそ私の宝である。佐々木先生の恩師であられた新明正道先生の大学院の講義を私が受けていたとき、佐々木先生が何かの用件で新明研究室に入ってこられ、新明先生とお話しされたことがあった。そのときの佐々木先生の様子はほとんど直立不動といってもよいものだった。私は師弟の厳肅さを感じた。しかし、私はというと、まったく不出来な弟子であり、態度も大きい。にもかかわらず先生は、出来の悪い私をいつも温かく励まし、包むように気長に導いてくださった。本当に感謝に耐えない。

その先生も一昨年4月に喜寿を迎えられた。東洋大学の船津衛教授をはじめ本学の大槻教授、山崎教授らのご尽力によって、多くの著名な社会学者が執筆し、昨年3月『現代の社会学 21世紀へ』（北樹出版）が先生の喜寿記念として出版されたことは大変に嬉しい。9年前、先生が古希を迎えられた時

も多くの社会学者が集まって盛大な記念パーティーが開催され、先生の編集になる『デュルケーム再考』（恒星社厚生閣）が記念に出版された。同じ年の秋には先生のゼミの卒業生・現役生が1期生から大勢集まって賑やかに記念のパーティーが開かれた。これらは、先生の誠実なお人柄と水の流れるような着実なお仕事振りを示すものであろう。

佐々木先生は、創大を去ってもさらにお元気でお仕事を続けられるであろう。その弛みない前進の姿勢を私もまた手本として歩んでいきたい。先生のますますのご健勝を心から祈るものである。